

# 実用性の彼岸

—— 1820年代の大学論争と *Fanshawe* ——\*

大野 瀬津子

## 序

『ファンシヨー——ある物語』(*Fanshawe, A Tale.*)は、ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne)が大学卒業から3年後の1828年、匿名で自費出版した処女作である。主人公は、ハーレー大学の男子大学生、社交的なエドワード・ウォルコット(Edward Walcott)と、孤独を好む学者肌のファンシヨー(Fanshawe)。バトラー(Butler)という男に誘拐された学長の養女エレン(Ellen)を、二人の男子大学生が追跡する。エレンを救出したファンシヨーは早世し、エドワードの方がエレンと結婚する。

この小説は、総じて若書きの失敗作という烙印を押され、大衆向けのメロドラマ、恋愛小説、感傷小説などの範疇に入れられつつも、様々な角度から読まれてきた。<sup>1</sup>しかし作中のハーレー大学がホーソーンの卒業した現実のボードゥン大学をモデルにしている、という見方は定説となっているものの、<sup>2</sup>大学という舞台設定を前景化した作品分析はほとんどない。

『ファンシヨー』はアメリカ最初の「大学小説」(college novel)である、と指摘したエリサ・タマーキン(Elisa Tamarkin)の論考は貴重な例外である(ch. 4)。<sup>3</sup>

\* 本稿は、2017年10月14日に鹿児島大学郡元キャンパスで開催された日本アメリカ文学会第56回全国大会における口頭発表原稿「大学は役に立つのか?——Nathaniel Hawthorneの*Fanshawe*における学知と世間知」に大幅な加筆修正を施したものである。本研究は、平成27年度科学研究費助成事業(課題番号15K12857)による援助を受けている。

<sup>1</sup> 作家自身が作品の出来に満足せず、出版後に回収して処分したという(Rocher 11, 150-51; Bridge 68)。同作品を未熟な習作として位置付ける論考として、Matthiessen 203, Miller 84, 大井 51参照。Millerは「メロドラマ」(78), Grossは「ゴシック・メロドラマ」(68), Baymは「ゴシックのアメリカ化」を意図した物語(107), Oriansは「ゴシックとセンチメンタルの系譜」(390), Matthiessenは「ロマンチックな恋愛物語」(203)として、同小説を位置づけている。これらに加え、先行研究には、Sir Walter Scottの影響を指摘するもの(Stephenson; Orians; 山本)、主人公 Fanshawe に孤独な芸術家 Hawthorne 自身の葛藤を重ねるもの(Milder; Bode)などがある。近年では、同時代の男らしさの言説(Greven 61-85; 松崎)や、出版市場の動向との関連(倉橋)も注目されている。

<sup>2</sup> Burnham 131; M. Hawthorne 248; Bode 235-36参照。

<sup>3</sup> John. E. Kramerによれば、アメリカ大学小説とは、“full-length work of fiction that incorporates an American institution of higher education as a crucial part of its total setting and includes among its principal characters graduate of undergraduate students, faculty members,

タマーキンは、学究の徒ファンシヨ어의夭逝と社交家エドワードの幸福な結婚という展開に、学問府から社交場へと変貌していく大学の大衆化を重ねる (ch. 4)。また松崎博は、作品が出版当時のアメリカにおける「大学への評価の低下を反映」している可能性を指摘する (87)。しかしこの物語は、語りの現在から遡ること80年前の大学を舞台としている。それは何を意味しているのか。この点について松崎は掘り下げておらず、タマーキンも説得力ある解釈を示していない。<sup>4</sup> 本稿では、時代設定にも注意を払いながら、感傷小説やメロドラマとしてではなく、大学小説として『ファンシヨール』を読む。

小説が執筆・出版された1820年代のアメリカでは、大学の古典教育は役に立たないという不満が庶民に蔓延し、市民社会と大学の乖離がクローズアップされていた。窮地に陥った大学側がとった策は、大学の実用性を宣伝することだった。同様に小説内の語りの現在および80年前の世界では、大学人と市民の間に断絶が存在する。有用性を掲げて世間の理解を求めた1820年代当時の現実の大学とは異なり、この物語で語られる80年前の世界では、危機に瀕した大学人と市民が連帯し、助け合う。本稿では、大学黎明期の民学連携を扱う『ファンシヨール』が提示する、大学と社会の実益中心主義に対する批判的距離について検討する。

## I. 1820年代の大学論争

ホーソーが『ファンシヨール』を書き始めたのは、1821年から1825年までのボードゥン大学時代、もしくは卒業後セーラムの自宅に戻った直後だといわれている (Martin 22; Gorman 35)。当時のアメリカは市場革命に伴う社会変化の只中であつた (Winterer 45-46)。さらに出版と同年の1828年の大統領選における庶民派ジャクソンの勝利に象徴されるように、知識人の教養よりも直観に基づく民衆の英知の方が秀でている、という反知性主義的な価値観が社会全体に膾炙していた (ホーフスタッター 135-41)。<sup>5</sup> 一般市民は「純粋な勉強」(pure learning)より「富の追求」(pursuit of wealth)を優先する傾向が強く、ボストンのある

---

administrators, and/or other college or university personnel”を指す (v)。Kramer も、『ファンシヨール』を同ジャンルの嚆矢と認めている (1)。なお、1950年代頃から台頭してきた現代小説のジャンルの大学の小説に注目する試み (巽128-53)もある。

<sup>4</sup> タマーキンは、エドワードに18世紀のお気楽なイギリス人大学生のイメージを重ね、物語を英国崇拜 (anglophilia) の系譜に連ねようとする (ch. 4)。しかしテキストには英国への言及がほとんど無く、この解釈には無理があるといわざるを得ない。

<sup>5</sup> アメリカの反知性主義については、ホーフスタッターと森本参照。前者は「知的な生き方およびそれを代表するとされる人びとにたいする憤りと疑惑」、「そのような生き方の価値をつねに極小化しようとする傾向」(ホーフスタッター 6)として、後者は「知性と権力の固定的な結びつきに対する反感」(森本 262)として、反知性主義を捉えている。

商人は教授を「二流の人間」(secondary men)とみなしている」と発言したという (Pessen 28)。こうした実益重視の風潮のなかで批判の的となったのが、大学におけるギリシア語、ラテン語などの古典教育だった。アメリカの大学は、古典語をカリキュラムの柱に据えていた (Winterer 1-2)。1826年頃までには古典の人気は失墜し始め (Potts 17)、古典を学んでも市場経済下で「役に立たない」(useless)という声が市井に高まっていく (Winterer 47)。1820年代の一般市民にとって、古典教育に代表される大学教育は、実社会とかけ離れたものだったのである。

古典教育の有用性を疑う庶民の大学批判に対し、大学側は対応を迫られた。その代表格がアマースト大学とイエール大学の各報告書である。<sup>6</sup> アマースト報告 (*The Substance of Two Reports of the Faculty of Amherst College, to the Board of Trustees, with the Doings of the Board Thereon, 1827*) は、古典を卒業要件から外すことを含む大学改革案をまとめたものである。同報告は、古典を必須とする現在の大学が産業社会のニーズに合っていない、という点を繰り返し強調する (Committee of the Trustees 3, 5, 7)。そして「大学の有用性をさらに拡大」(more extended usefulness of the College)するには大学改革が必要だ、と訴える (5)。つまり、現状では大学が社会から遅れをとっているから、古典教育を縮小してより産業化社会に見合った教育内容に転換することで大学の有用性を高める、という論法である。

他方、イエール報告 (*Reports on the Course of Instruction in Yale College, 1828*) は、ラディカルな改革を拒絶し古典科目の重要性を訴えた点で、アマースト報告と好対照を成す。報告の第一部において、大学教育の目的は「より高い教育の基礎を築くこと」(lay the foundation of a superior education)と定義される (Committee of the Corporation and the Academical Faculty 6)。その上で、「実践的技芸」(practical arts)の習得が求められる今、なぜ「理論」(theories)の習得で時間を割くのか、という大学批判 (16)に対し、自分たちは理論と実践を融合させて科学的探究に関わることを旨としている、と実践的観点から従来の教育方針を自己弁護する (17)。さらに、卒業生は科学知を社会のあらゆる階層に伝授している、とも示唆する (15)。つまり大学は現状のままでも、学生に使

<sup>6</sup> イエール大がもたらした影響は大きかった。同大学が出版したイエール報告は、出版直後から1870年代頃までの大学の方向性を左右し (Potts 47-48)、かつ独立革命から南北戦争までのアメリカ高等教育史において「最も影響力があった出版物」とも評されている (Brubacher 104)。対して、アマースト大を筆頭とする1820年代のカリキュラム改革はほとんど失敗に終わった (Potts 45)。ただし1870年代以降、アメリカの大学は古典軽視の傾向を強め、実用性重視のカリキュラムへと一気に舵を切ることになる (Winterer 99-101)。

える知識を提供しているし、卒業生による社会の啓蒙という点で公共の利益になっている、というわけである。第二部では、学生にとっての古典学習の意義が、「実用性と必要性」(use and necessity) (34)、「役立つ」(useful) (36)などの言葉の多用によって、実践的側面——欧米の人々との会話での活用、精神の陶冶、聖職や法曹など専門研究の基盤形成等——から擁護される(34-36)。このようにイエール報告は、古典教育を核とする伝統的ナリベラル・エデュケーションが、社会にとって、または学生にとって、いかに使えるものであるかをアピールしている。

アマースト報告は、大学に実用性を求める市民に迎合し、カリキュラム改革によって実社会との懸隔を埋めようとした。対するイエール報告は同じく大学の価値を実用性に限定しながらも、大学は現状でも役に立っていると主張し、現状の枠組みを維持しようとしたのである。

## Ⅱ. 『ファンション』と1820年代の大学論争

市民社会の要請に対する両報告の対応を念頭に置きつつ、『ファンション』の考察に移ろう。冒頭での語り手の描写によると、語りの現在、ハーレー大学は、ニューイングランドの片田舎に位置する世間の喧騒から隔絶した「学問府の壁」(walls of a seminary of learning)として聳え立つ(3-4)。さらに“The character of the inhabitants does not seem—as there was perhaps room to anticipate—to be in any degree influenced by the atmosphere of Harley College.”(4-5)という説明が続き、1820年代当時の大学に向けられた象牙の塔批判をなぞるように、大学と市民社会の間にほとんど交流がないことが暗示される。大学の査定基準も近似している。同大学の卒業生のなかに「学識を深く究めた者」(deep and finished scholars)はほとんどいないものの、同大学は「使える」(useful)人材を輩出してきた(4)。卒業生の「理論的知識の不足」(deficiency in theoretical knowledge)は、「実践力の欠如」(want of practical ability)とはみなされていない(4)。これは、「実践的技芸」の習得が求められる今なぜ「理論」の習得で時間を割くのか、というイエール報告で紹介されていた実践力重視の市民の声、さらには同様に実益を重視するイエール報告とアマースト報告の論調を彷彿とさせる。語りの現在の状況は、理論や学究を退け、有用性や実践性に大学教養の価値を限定する点で、1820年代アメリカの大学論争と軌を一にしている。

語りの現在から遡ること80年、物語の舞台となるハーレー大学も、市民生活から孤立した象牙の塔として設定されている。学長のメルモス博士(Doctor Melmoth)は、家庭では妻の支配の及ばない書齋に閉じこもり、「深みはあるが必ずしも役に立つわけではない骨の折れる仕事」(deep though not always

useful labors) に没頭している (7)。学生ファンシオーは、人々との交わりを避け、「離れの書齋」(solitary study) で読書にふける生活を送っている (22)。もう一人の学生エドワードは上記二人のような孤高の学者タイプではなく、早くから上流社会で社交をたしなみ、多少の遊びにも手を染めている (14)。しかしメルモスと「近い関係」(nearly related) にあり彼の家に足繁く通っている (14) ことから、エドワードも基本的にはアカデミアの世界に所属しているといえる。

大学の外の世界は至って対照的に描かれる。大学の近くにある居酒屋を併設した宿屋は、旅人にも開かれた開放的な空間である (37)。<sup>7</sup> 宿の主人ヒューは、子ども時代から放蕩三昧で、外国での放浪生活を経て村に戻ってきた後、宿の主人の座につき、音楽家・詩人としても活動している (38-39)。世間の荒波に揉まれて来たヒューの来し方を、語り手は「こうした教育の進路」(this course of education) と表現し (38)、高等教育、いわば「ああした教育の進路」(that course of education) をたどる大学人とは違うことを示唆する。

実利に携わらない大学人と俗塵にさらされた地域住民がふたつの文化を構成しているさまは、宿への出入りが学則で禁じられているという事情 (54) によって裏書される。実利や実践と、理論や思索という二種の価値が分断している状況は、大学の有用性を問う1820年代の論争を反映しているように見える。

### Ⅲ. ミニマルな同胞意識の発見

もし実利とは無縁だった学者が世の中の役に立つ、という展開をたどるならば、この物語はアマースト報告やイェール報告同様、大学と市民社会の関係性を実用性の観点から描いていることになる。しかし語り手は危機的状况に対処する学生エドワードとファンシオーの姿を通して、実用性とは別の次元で大学人が市民とつながる道を提示しているように思われる。本節では、エドワードと宿の主人ヒューとの関係に注目する。

まずはエドワードが、異邦人と感じる存在によって「同族」(kindred) の意識に目覚めることを確認したい。エドワードは釣り人らしき男バトラーを初めて見たとき、恋人のエレンに対し、次のようにいう。“Do but look at him, Ellen, and judge whether his life can have been spent in this lonely valley,” he replied. “The glow of many a hotter sun than ours has darkened his brow; and his step and air have something foreign in them, like what we see in sailors, who have lived more in other countries than in their own . . .” (27). ここでエドワードは、その日焼け具合や歩き方から、男に船乗りのように「どこか外国的なもの」

<sup>7</sup> 西前は、聖と俗が出会う「中間領域」としてこの居酒屋兼宿屋に注目している (223)。

(something foreign) を見ている (27)。男を余所者と同定するエドワードの判断と同時に、男や船乗りとは違う「僕たち (の日焼け具合)」(ours) という意識が立ち現れる。

重要なのは、エドワードの仲間意識の範疇が、もともと親しい間柄だったエレンやファンショーだけでなく、学問府の壁の外にいる住人にも及んでいくことである。バトラーの出現以来エレンの態度が急変したことにフラストレーションを感じたエドワードが、もう一人の学生を連れて久しぶりに居酒屋兼宿屋の敷居をまたぎ、後から合流したファンショーとともに宴会に興じる場面を考察してみよう。「同学年の詩人」(poet of his class) たるエドワードが、即興詩をメロディーに乗せて口ずさむと、自ら作詞作曲も手掛ける宿の主人ヒューが入ってきて、その即興歌の凡庸さを冗談交じりに嘆き、ハーレー大学は詩や歌の分野で洗練されていない、それは大きな欠点だ、とあげつらう (60-61)。さらに、詩の教授職の話が舞い込むかもしれない、とおだてるエドワードに対し、ヒューは、自分は一般市民だから、自分が教授になって今の持ち場を離れることを市民は嫌がるだろう、と返す (61)。ここから導かれるのは、詩作という話題と即興歌という遊びを異なる世界に生きるエドワードとヒューが共有していることである。同時に、共通点を通して二人が親密になる点も特筆に値する。やりとりの直後にヒューは、この粗野な田舎で「同族のような才人」(kindred genius) に出会うことは稀だ、とエドワードの詩作の才能を冗談半分に認め、同族意識の芽生えを隠さない (61)。さらに翌朝バトラーにさらわれたエレンを助けに行くための馬をヒューがエドワードに貸す際、ヒューは “I have spoken to you as I would to my own son . . .” (87) と告白する。ヒューは、息子に対するような愛情をエドワードに抱いているのだ。共通の趣味と遊びを介して生まれたこの肉親的な感情は決して一方通行ではない。ヒューの作ったバラードのリズムに合わせて馬を進めるエドワード (89) に鑑みれば、二人の間には双方向の紐帯が生じていることは疑いの余地がない。<sup>8</sup>

1820年代の大学論争に照らせば、地元住民との交流を図るエドワードは、市民社会との隔絶を埋めようとするアマースト報告に近い。ただしアマースト報告が市民社会の要請に応えるポピュリスト的対応だったのに対し、エドワードはヒューとの間に差異を認めつつも、新たに共通の地平を作り出すことに成功している。大学人エドワードの実践には、一般社会の実利主義に迎合するのではなく、

<sup>8</sup> ひょっとすると、もしエレンの誘拐が起こらなかつたとしても、エドワードは同じようにヒューと親しくなっていたかもしれない。なぜならエドワードは、ファンショーから「普通の職業」(common occupation) (122) に就きそうな人間と目されるように、もともと勉強一筋というわけではなく、学則を犯してヒューの店に度々出入りしていたからである (55)。

一人の市民との間に共通点を見い出し、隔たりを埋めて親愛の情を醸成する、という解法を認めることができる。

#### IV. 概念としての共同性

ファンショ어도、釣り人バトラーを「見知らぬ者」(stranger)と同定し(36)、共同体の意識に目覚める。しかしヒューという具体的な人間と関係を構築したエドワードと違い、ファンショードにとって人々のつながりは、より抽象的な思索の結果として現れる。本節ではファンショード独自の共同体の概念について考察する。

鍵を握るのはエレンである。先行研究では、エレンに対するファンショードの思いが恋愛感情と解され(Miller 79)、作品全体もメロドラマや恋愛小説の系譜に入れられてきたが、それらは妥当ではない。ファンショードが村外れの川沿いの絶壁の底部にいるバトラーとエレンを見つけ、まさにエレンの救出に臨もうとする場面を見てみよう。そこで彼は自己犠牲の精神を示すが、彼が我が身と引き換えにしても守り抜きたいものとは、エレンという実体ある一人の人間ではなく、「彼にとって大切な全てのもの」(all that was dear to him)という感傷的な対象として認識されている(130)。ファンショードは、ずっと自分を「世界とつながらない」(unconnected with the world)「孤立した存在」(solitary being)とみなしてきた(22)。そんな彼もエレンと出会った瞬間に変わる。“But now he felt the first thrilling of one of the many ties, that, so long as we breathe the common air . . . unite us to our kind” (22).つまりファンショードはエレンを通じて、共通の空気を吸っている人間たちをひとつの「同類」(our kind)へと結びつけるあまたの「絆」(ties)のひとつを感じ、それを感じたことに興奮しているのだ。ここで「同類」へと統合される人々が、もともと異なる人間同士である点は重要である。

この点についてさらに掘り下げるには、エレンの救助に向かう途中で挿入されるファンショードの思索が導きの糸となる。

He had read her character with accuracy, and had seen how fit she was to love, and to be loved by a man who could find his happiness in the common occupation of the world; and Fanshawe never deceived himself so far, as to suppose that this would be the case with him. Indeed, he often wondered at the passion, with which Ellen's simple loveliness of mind and person had inspired him, and which seemed to be founded on the principle of contrariety, rather than of sympathy. It was the yearning of a soul, formed by Nature in a peculiar mould, for communion with those to whom

it bore a resemblance, yet of whom it was not. But there was no reason to suppose that Ellen, who differed from the multitude only as being purer and better, would cast away her affections on the one, of all who surrounded her least fitted to make her happy. (122-23)

この一連の描写は、「群集」(multitude)と変わらぬエレンには「普通の職業」(common occupation of the world)に就くエドワードのような男性がお似合いであり、自分は彼女に相応しくない、というファンショアの考えを詳らかにしている。つまりファンショアは、エドワードと同じ世俗的世界の住人としてエレンを位置づけ、自分をそこから外れた人間とみなすのである。この構図を押さえた上で、ファンショアにとってエレンがどのような存在なのか読み解いてみよう。引用の3行目で語り手は、エレンの性格は普通の職業に就く男性と愛し愛されるのに向いており、彼女の相手として自分が相応しいなどと思い込んだことはない、というファンショアの認識を提示する。そして事実、そのように認識しているからこそファンショアは、自分と違って単純素朴なエレンの人柄が自分に呼び覚ます「情熱」(passion)のありようについて思い巡らせてきたのだ、と語り手は示唆する。この文脈では、自分とそぐわない性格のエレンに心惹かれる所以をあれこれ考えるファンショアの内面が叙述対象となっているので、この「情熱」はエレンに向けたファンショアのものとして判断できる。ファンショアの自己分析によれば、彼が俗物のエレンに寄せる情熱は、「共感」(sympathy)ではなく「不一致」(contrariety)に起因する(123)。さらに不一致ゆえに感じるその情熱とは、自分と似たところはあるがその類ではないものとも「交歓」(communion)を結びたい、という「魂の切望」(yearning of a soul)である(123)。つまりエレンは、異質な人間でありつつも「交歓」をもちたいと思わせてくれる触媒のような存在なのである。よって、ファンショアが命がけで救おうとする「彼にとって大切な全てのもの」とは、エレンそのものではなく、エレンを対象として彼の内に生じた、異なる人間との「交歓」に対する切望に他ならない。

このようにファンショアにとっての共同体は、エレンを触媒として感じることでできるより高次の結びつきを指す。彼はエレンという具体的人間を糸口としつつ、人々のつながりを“our kind”へと抽象化する。これはまさしく学者の態度といえるだろう。ただしファンショアの共同体の意識は、絆を感じさせてくれるエレンが失われるという危機の瞬間につかのま立ち現れた一過性のものに過ぎない。危機が去った後、ファンショアはエレンからの結婚の申し込みを断り、再び孤独な学究生活に戻るからだ(139-40)。しかしたとえ一時的にせよ、ファンショアが共同体という概念の救出のために立ち上がる点は強調しておかなければ



ならない。

ここで1820年代の大学論争の文脈と照らし合わせてみると、異なる人間同士がその差異ゆえにひとつに束ねられるという絆の概念、そして結局は離れのなかに引き籠ってしまうというファンシヨアの行動は、大学と市民社会の枠組みを取り払おうとしないイェール報告を想起させる。しかし、イェール報告が大学の孤塁を守るべく、市民社会で膾炙している実用性の価値を学術に認める、という苦肉の策を講じたのとは対照的に、ファンシヨアはあくまで思弁という学術的方法を貫く。アカデミアと市民社会の分断の根底にある共同性に学術的手法からも接近しうることを、ファンシヨアは示している。

### 結び

大学と市民社会の懸隔が問題となった1820年代、アマーフト報告は大学の実用性を高めて一般社会との隔たりを埋めようとし、イェール報告は現状での実用性を根拠に大学の独立を死守しようとした。危機に際し学問府の外に出て行く大昔の大学生たちの姿は、大学人が大学と市民社会の間に交通を開くための二つの別解を示しているように思われる。エドワードは、アマーフト報告のように一方的に市民社会に合わせるのではなく、個人レベルでミニマルな心理的結びつきを構築していく、という経験論的方法を体現している。ファンシヨアは、イェール報告のように実用性という大衆的価値に基づいて大学の枠組みを守る代わりに、大学と市民社会の区別の根源にある異なる人間同士の共同性の存在を思索している。これこそ、『ファンシヨア』がメロドラマや感傷小説ではなく大学小説であることの証左に他ならない。もっとも彼らの共同性は、“something foreign”なものの侵入によって反動形成されたナショナルな意識である点は無視できない。さらに、時代は下って語りの現在、大学と社会が再び「学問府の壁」で隔てられているという描写(3)は、彼ら個人の経験的あるいは思弁的な試みが、大学と実社会を分ける構造自体を変えるには至らなかったことを暗示している。たとえそうだとしても、彼らが大学と市民社会という分断された二つの世界の根源にある人々の共同性に触れていることは確かである。翻って現在の日本では、大学に実用性を求める声がいや増し、産学連携的な取り組みばかりが推奨されがちである。一般市民との共同性に触れるエドワードの経験とファンシヨアの思索は、窮地に立たされた現在の大学人にも一条の光となりうるのではないか。

九州工業大学

## Works Cited

- Baym, Nina. "Hawthorne's Gothic Discards: *Fanshawe* and "Alice Doane." *Nathaniel Hawthorne Journal* 4 (1974): 105-15.
- Bode, Carl. "Hawthorne's *Fanshawe*: The Promising of Greatness." *New England Quarterly* 23 (1950): 235-42.
- Bridge, Horatio. *Personal Recollections of Nathaniel Hawthorne*. New York: Harper, 1893.
- Brubacher, John S., and Willis Rudy. *Higher Education in Transition: A History of American Colleges and Universities*. 4th ed. New Brunswick: Transaction, 2008.
- Burnham, Philip E. "Hawthorne's *Fanshawe* and Bowdoin College." *Essex Institute Historical Collections* 80 (1944): 131-38. *Internet Archive*. 5 Mar. 2019 <<https://archive.org/details/essexinstitutehi80esse/page/n5>>.
- Committee of the Corporation and the Academical Faculty. *Reports of the Course of Instruction in Yale College*. New Haven: Hezekiah Howe, 1828. *Internet Archive*. 22 May 2018 <<https://archive.org/details/reportsoncourseo07yale>>.
- Committee of the Trustees. *The Substance of Two Reports of the Faculty of Amherst College, to the Board of Trustees, with the Doings of the Board Thereon*. Amherst: Carter, 1827. *Internet Archive*. 22 May 2018 <<https://archive.org/details/substancetworep00collgoog>>.
- Gorman, Herbert. *Hawthorne: A Study in Solitude*. New York: Biblio, 1966.
- Greven, David. *Men Beyond Desire: Manhood, Sex, and Violation in American Literature*. New York: Palgrave, 2005.
- Gross, Robert Eugene. "Hawthorne's First Novel: The Future of a Style." *PMLA* 78.1 (1963): 60-68.
- Hawthorne, Manning. "Nathaniel Hawthorne at Bowdoin." *New England Quarterly* 13 (1940): 246-79. *JSTOR*. 1 Oct. 2017 <<http://www.jstor.org/stable/360754>>.
- Hawthorne, Nathaniel. *Fanshawe, A Tale*. Boston: Marsh, 1828.
- Kramer, John E. *The American College Novel: An Annotated Bibliography*. 2nd ed. Lanham: Scarecrow, 2004.
- Martin, Terence. *Nathaniel Hawthorne*. New York: Twayne, 1965.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. London: Oxford UP, 1949.

- Milder, Robert. *Hawthorne's Habitations: A Literary Life*. Oxford: Oxford UP, 2013.
- Miller, Edwin Haviland. *Salem Is My Dwelling Place: A Life of Nathaniel Hawthorne*. Iowa: U of Iowa P, 1991.
- Orians, G. Harrison. "Scott and Hawthorne's *Fanshawe*." *New England Quarterly* 11.2 (1938): 388-94.
- Pessen, Edward. *Jacksonian America: Society, Personality, and Politics*. Rev. ed. Urbana: UP of Illinois P, 1985.
- Potts David, B. *Liberal Education for a Land of Colleges: Yale's Reports of 1828*. New York: Palgrave, 2010.
- Rocher, Cecile Anne de, ed. *Elizabeth Manning Hawthorne: A Life in Letters*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 2006.
- Stephenson, Mimosa. "Scott's Influence on Hawthorne." *Studies in Scottish Literature* 28.1 (1993): 123-32. 6. Oct 2017 <<http://scholarcommons.sc.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1345&context=ssl>>.
- Tamarkin, Elisa. *Anglophilia: Deference, Devotion, and Antebellum America*. Chicago: U of Chicago P, 2007. [Kindle version]. Retrieved from Amazon.com.
- Winterer, Caroline. *The Culture of Classicism: Ancient Greece and Rome in American Intellectual Life: 1780-1910*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2004.
- 大井浩二『ナサニエル・ホーソン論——アメリカ神話と想像力』南雲堂 1977.
- 倉橋洋子「19世紀初頭のアメリカの文学界と『ファンショール』」『世界文学』107 (2008) : 36-43.
- 巽孝之『盗まれた廃墟——ポール・ド・マンのアメリカ』彩流社 2016.
- 西前孝「「中間領域」の萌芽——ホーソン作 *Fanshawe* を読む」『英語青年』135.5(1989) : 221-23.
- ホーフスタッター, リチャード『アメリカの反知性主義』田村哲夫訳 みすず書房 2003.
- 松崎博「Learning's Labour's Lost? ——Hawthorne の *Fanshawe* について」『愛知学院大学文学部紀要』39(2009) : 85-98.
- 森本あんり『反知性主義——アメリカが生んだ「熱病」の正体』新潮社 2015.
- 山本雅『ホーソンと社会進歩思想——神慮と進歩』篠崎書林 1982.

Going Beyond Usefulness:  
The Dispute over College Education in the 1820s  
Seen through the Lens of *Fanshawe*

---

Setsuko Ohno

---

Nathaniel Hawthorne's *Fanshawe* (1828) has its main setting in a college eighty years ago. The novel, however, has been categorized as either sentimental novel or melodrama, and the background of the story has received little scholarly attention. Hence, this paper tries to interpret the work as a college novel with the time lag in mind.

When Hawthorne wrote the novel in the 1820s, the economy was booming and anti-intellectualism became rampant. Under such conditions, the public demanded that a higher education should be more useful, criticizing classical studies such as Latin and Greek for being useless. We can see typical responses of colleges to the criticism in the reports written by the faculties of Amherst and Yale. The Amherst Report of 1827 accommodated itself to the public need, and tried to fill the gap between academia and civic society by omitting Greek and Latin from graduation requirements. The Yale report of 1828, on the other hand, asserted that the traditional college education was practical and maintained the old curriculum.

At the present moment of narration in *Fanshawe*, Harley College is isolated from the world by the "walls of a seminary of learning." Moreover, the public values college graduates from the viewpoint of utility while not caring about their lack of theoretical knowledge. The evaluation criterion as well as the gulf between town and college community share the social context on which this college dispute in the 1820s was based. The college of old times is also depicted as an ivory tower. Scholars and neighborhood inhabitants are divided into two different groups. The division seems to reflect one in the 1820s.

The characters, however, don't rely on the notion of utility as the Amherst and Yale Reports emphasized. Two students, Edward and Fanshawe, become more conscious of community after they perceive a kidnapper of their friend Ellen as an outsider. Edward shares a sense of "kindred" spirit with Hugh, who is the owner of a tavern, by the common topic of poetry and

sharing the fun of improvising songs. His attitude looks similar to the Amherst Report's, in that he seeks to communicate with the general public. Yet while the Amherst Report acts on the public urge to be useful, Edward tries to find common ground. His behavior shows the possibility of establishing kinship ties with an inhabitant by discovering that they have something in common.

In Fanshawe's case, community appears as a result of more abstract thinking. He realizes, through Ellen, that there are "ties" which unite different individuals. In other words, he abstracts the concept of communion from his own experience; his attitude is nothing short of a scholar's. He returns back to his isolation after saving Ellen, which reminds us of the conservative mindset of the Yale Report. The Report and the character of Fanshawe, however, take contrasting approaches in maintaining this isolation. The Report borrows the populist notion of utility, whereas Fanshawe sticks to the scholastic way of contemplation. His attitude tells us that a scholar could feel in touch with community through his or her academic pursuits.

We must not ignore the point that Edward's and Fanshawe's sense of community was built in reaction to the intrusion of an outsider. Furthermore, the existence of the "walls of a seminary of learning," eighty years after the sequence of events, imply that those students' struggles were not enough to change the division between academia and civic community. Even so, one thing is certain; both students reached the state of realizing some kind of community, which not only binds different individuals together but also lies beneath the divided cultures. Turning now to the present state of affairs in our country, there is an increasing demand for usefulness and practicality in higher education. Even in this predicament, we could see rays of hope in Edward's experiential and Fanshawe's academic approaches in getting in touch with their community.

*Kyushu Institute of Technology*